

## 自己評価報告書

平成23年5月19日現在

機関番号：32701

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720081

研究課題名（和文）ヴィクトリア朝の出版形態がトロロプの小説に与えた影響について

研究課題名（英文）The influence of the Victorian publishing formats on Trollope's novels

研究代表者

委文 光太郎 (SHITORI KOTARO)

麻布大学・獣医学部・講師

研究者番号：70367241

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米文学、トロロプ

## 1. 研究計画の概要

本研究の目的は、ヴィクトリア朝における多様な出版形態が、当時の作家たちの中心的存在の一人であったアントニー・トロロプの作品にどのような影響を及ぼしたのかを解明することにある。なお、本研究には彼の作品のみならず、英米の図書館に所蔵されている直筆原稿や作業日誌の閲覧・分析も不可欠となる。

## 2. 研究の進捗状況

これまでの3年間は、雑誌への連載、週刊分冊、2巻本というそれぞれ異なる形式で出版されたトロロプの小説を中心に上げて、作品への出版形式の影響の有無を考察した。詳しくは以下の通り。

(1) 初の連載形式により発表された『フラムリー牧師館』(1861)と、それとほぼ同時期に書かれ3巻本として出版された『リッチモンド城』(1860)の両作品間の隠れた連関を探るため、『フラムリー牧師館』の作業日誌の裏面にメモ書きされていた各章のタイトルの一覧に注目した。その結果、そこには空白部分や変更箇所が存在しており、トロロプがアイルランドを舞台とする小説を読者に好意的に受け入れてもらうため、『フラムリー牧師館』において副牧師のクローリーが初めて登場する号と、『リッチモンド城』の出版日を意図的に近づけようとした可能性があることがわかった。そこで、この研究成果を「アイリッシュとしてのクローリー家：Trollopeの *Framley Parsonage* と *Castle Richmond*」として論文にまとめた。

(2) 初の週刊分冊形式により発表された『最

後のバーセット年代記』(1867)を取り上げて、分冊出版というスタイルがこの作品に及ぼす影響について考察した。その結果、32号からなるこの作品のほぼすべての号において、登場人物による類似または対照的な行動を挿入することにより、長い物語の一部分にすぎない1つの号に、個としての一体感を持たせようと試みられていたことが明らかとなった。そして、この研究成果を「まとまりあるもの」を求めて—トロロプの『最後のバーセット年代記』」として論文にまとめた。

さらに、この作品の主人公が英国国教会の副牧師であったことから、この直前に新聞に連載されていたトロロプの『英国国教会の聖職者たち』(1866)も考察対象として取り上げた。そして、当初の予定にはなく急遽追加されたあるひとつの章が、『最後のバーセット年代記』の着想の源であることを示唆する内容であることを明らかにした。そこで、この研究成果を「追加された2つの章：Trollopeの *Clergymen of the Church of England*」として論文にまとめた。

(3) 雑誌への連載や分冊出版という形をとらず2巻本で出版された『マッケンジー嬢』(1865)に焦点を当て、自筆原稿と作業日誌を参照しながら、その作品が実際にどのように執筆されたのかを詳細に検証した。その結果、出版社との契約通りに2巻本で出版されたにもかかわらず、この作品が3つの章を1号とした全部で10号からなる連載形式を想定して書かれていたことが判明した。そこで、この研究成果を「連載小説としてのトロロプの『マッケンジー嬢』」として論文にまとめ、論集『英語英米文化の深層』(仮題)(2012年1月出版予定、音羽書房鶴見書店)に投稿し

た。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

一度に複数の図書館を訪れるなど、効率的な資料収集ができたため。

### 4. 今後の研究の推進方策

昨年度に引き続き、まだ完成していないトロロプの『ベルトン家の家督』(1866)を取り上げた論文を完成させる。その上で、過去3年間の研究から得られた成果を再度それぞれ見直した上で、トロロプの作品がヴィクトリア朝の多様な出版形態から受けた影響に関する総括を行なう。

また、この問題をより大きな出版文化史的な視点から考察するため、トロロプ以外の当時の小説家にも焦点を当て、トロロプの作品が受けた影響がはたして彼特有のものなのかどうかも検討する予定である。なお、海外の図書館に所蔵されている彼の自筆原稿ならびに作業日誌に関して、必要なものはすでに閲覧・分析済みであるため、本年度は国内にて必要な書籍を購入しながら研究を進めていく予定である。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 委文光太郎、「「まとまりあるもの」を求めて—トロロプの『最後のバーセット年代記』」、『英米文化』、第40号、145—166、2010、査読有
- ② 委文光太郎、「追加された2つの章：Trollope の *Clergymen of the Church of England*」、『ヴィクトリア朝文化研究』、第7号、35—49、2009、査読有
- ③ 委文光太郎、「アイリッシュとしてのクローリー家：Trollope の *Framley Parsonage* と *Castle Richmond*」、『テキスト研究』、第5号、20—34、2009、査読有